

Triumph onedollar ～勝
利への放浪者～

リューヤ

シーバルーの生活において、食べ物に困ることがなくなった。車でこの広大な石と砂の世界を走っているだけで食べ物が襲い掛かってくるからだ。

シーバルー大陸に降り立って早数十日、ドラゴンの肉とは意外なくらいに美味しいものだを知った。特に全員が食って美味しいと思ったのが意外なことに火を吐くことのできるドラゴン全般だった。狩りになると倒し切るまでに大分時間を要するがこいつの肉をジェットの炎でしっかり焼いて食うと、とてもジューシー且つ肉汁が溢れ出して最高に美味しいのだ。ドクターは野菜も食いたいとしょっちゅう呟いているが、アゲートに至ってはこれに塩さえあれば何もいらないと大絶賛していた。ちなみにオレは焼き肉ならサンチュが欲しいところだ（ジン談）

今回の話は、そんなシーバルー特有のグルメに舌鼓を打ち満腹になった後の話だ。現在車は虎眼が運転し、助手席にはドクターが座り地図を広げている。今日も激しく照りつける炎天の太陽にアゲートがダウン気味だが、そんなことはハッキリ言って関係ない。現在一行を乗せた車は北西を目指して走行していた。

「あっち～さ～・・・暑いさ～・・・焼けるさ～・・・」

「うるさいから黙ってる・・・ところでドクター、運転しておいてなんだが今度はどこへ向かっているんだ？」

「うん、この先にシーバルーの中で一番大きい街、「グレネド」へ向かっている」

「グレネドお？あぁ聞いたことあるな。確かこの国中で一番武器生産が盛んな武器商業都市だとか？」

「その通り、連日のドラゴンと連戦の影響で小生の、そして後ろの連中の獲物がかなり傷んでいる」

ドクターの言うとおりに、ここ数日の間にケンカを売ってきたドラゴンの数は十数匹に及んでいる。もちろんすべて快勝しそのほとんどが彼らの腹を満たす結果となっているのだが、いかんせん石や金属のように固い鱗を要する連中のせいでジンの剣やアゲートの斧がボロボロになってしまったのだ。ドクターのメスは持参しているやすりで丁寧にこすっていたが限界が来ているのも事実。虎眼のナックルダスターに至っては拳のボールベアリングがすでに全て剥がれ落ちてしまい、ただの革手袋になってしまっている。そこでこの前、今は後ろで寝ているジンからの要望で、この疲れた武器た

ちを鍛え直すためにわざわざ本来の進路をズラして武器商業都市のグレネドへ向かってるといわけだ。

「と言うか君はその手袋に関してはもうずいぶん前に壊れていたはずだろ？気にならないのかい？」

「俺の拳は素手で鉄板など貫ける。多少破損した程度で俺は弱くなったりなどしない。」

「虎眼、お前まさか今までそんな状態でドラゴンを殴り倒してきたのか？」

「…何か問題でもあったか？」

「…アタシが悪うございました」

あまりの非人間性に驚きを通り越して呆れてしまったジェットは、もうこれ以上何も言わずに肩を落としてしまった。どっちにしる魔術を使うジェットに、武器の話など全く関係などないが。

とにかかくにも、一行を乗せた車は、一路グレネドを目指し走り続けるのだった。

翌日の昼前、一行はグレネドの町に到着することができた。車を降りてドラゴン除けのために設置された大きな門をくぐると、活気ある大勢の人間の声と足音、そして門の外からでもわかってきた煙のにおいが出迎えてくれた。この国で最も巨大な武器商業都市と呼ばれるだけあり、歩いている限り最も多く目に映るのはそれぞれ思い思いの武器を引っさげた男どもの姿だった。槍、剣、斧、弓、棍棒、錘、ナイフ、鎚、刀、ボウガン、銃、まさに武具の大集合カーニバルのような光景だった。

「ほっへ～、こいつぁ見事な街さ！」

「…辺りから煙のにおいが目に染みるし、くせえ」

「キシシシシ…規制の激しい武器の製造が許されている中でこの街は特に優秀な職人が集まっていると聞いている」

「これだけ人が集まっているのを見るのも久しい気分だな」

「迷子になったら敵わねえなこりゃ」

ラプチナよりも広大なこの街は、大きすぎるので全体を5つに区切っているとドクターが説明してくれた。順に分けると東西南北、そして中央の五分割だ。今一行がいるのはその中の南エリア、武器以外の商業を営んでいる通常の買い物エリア。

ちなみに西エリアはこの街の住人たちの住む住宅が立ち並ぶ居住区エリア、東に行けばこの街の名物武器屋が軒を連ねるエリア、通称「ウェポンストリート」。北エリアにはウェポンストリートの中でも特に大手の武器屋が所有している武器専用の格納庫がそびえ立つ格納区、そしてこの街の中央には巨大なイベント専用のスタジアムがある。大きさに関してはラプチナでジンが剣士のオーディションを行った時のスタジアムより一つか二つ周り大きいサイズとなっている。

「へー、ドクターここ来るの初めてなのにずいぶん詳しいさね？」

「キシシシ、小生は君のようにバカではない」

「ドクター、遠回しにオレっちにケンカ売ってるさ？」

「どーでもいいや。アタシゃ失礼するよ」

言うより早いのか、ジェットは杖に乗るとスイッと空を飛んで行ってしまった。もともと武器類とは全く関係のないジェットにとってこの街はあまり面白そうなものがないと判断し、仕方ないから散歩すると言い出したのだ。後で探すのが面倒くさそうなので一度止めようかとも思ったが、ジンが代わりに今日の宿を探させるのを条件に自由

行動を許可した。退屈そうに返事を返すと、ジェットはそのままあくびをしながらどこかへ行ってしまった。

「ま、アイツにしてみれば仕方がないといえれば仕方がないか」

「だな、オレらもとっととその辺の店でエモノ鍛えてもらおうぜ」

「そうするさ！ところでドクターは…ってあれ？」

ついさっきまでドクターが立っていた場所を振り返ってみると、いつの間にかドクターの姿は忽然と消え去ってしまっていた。

ドクターの場合は行動が自由すぎて困ると、虎眼は頭を抱えた。

仕方なく今回は取り残された野郎三人で東エリアへ向かうこととなった。武器商店街へ近づいていくと、だんだん煙のにおいが濃くなるばかりか、鉄を打つ乾いた音と三人以外の野郎の汗のにおいがキツくなってきてジンはだんだんイライラしてきた。しかし流石はウェポンストリートと呼ばれるだけのことはあった。道を一本挟んだ両側には様々な武器を扱った武器の専門店が立ち並んでいる。あらゆる武器をオールマイティに取り扱う基本的な店から刃物専門、打撲系専門、あるいは珍品を取り扱う店や鎧などの防具を扱う店に研ぎ専門、オーダーメイドで世界に一つしかない自分だけの武器も作りますなんてのぼりを立てた店まである。ほかにも武器は卸さず製造のみの店も見つけた。

「思った以上にすごい街だったんだな…」

「うむ…俺もここに来るのは初めてだが、なかなかいい街のようだな」

「でもあんまり長い時間いたくないさあ…ここなんか鼻が曲がりそうなくらい臭いさ。」

「オレも同感だ、とっととその辺の店に顔だして用済ますか…」

人が密集しすぎているせいでタバコもろくに吸えないジンがイライラしながらそう言った。

だが……

「へいらっしゃい！！武器のことならうちの店、「ゲイボルク」にお任せあれええ！！」

「毎度お！！今日は祭りだから打撲系武器全品3割引きだよお！！」

「いらっしゃせえええ！！安さならうちの店がこの街一番、どれを選んでもひとつ2万Lだよおお！！」

「そこのお兄さん、うちで武器を新調してみないかい！？男気ムンムンのサービスしちゃうよお！！」

「アラァそこの可愛いボクちゃんたち～、今日変わった鞭や鎧が入荷したんだけどお、興味な～い？（男ヴォイス）」

ドカンッ！！

一瞬、悪夢を見たような気がした。上半身裸で日焼けしたむさ苦しい体にエプロン一枚をまいた筋肉隆々のおっさんたちが大拳を成し、己の汗と唾を飛ばしながらソロバン片手に自分の店を全力でアピールする姿なんて、きっと夢に違いない…ああ夢だとも。

ここに来た当初より若干痩せた気がする三人はどこぞの店の扉を開き、急いで中へ入って扉を閉め呼吸を整えようと必死になった。あの虎眼ですら顔が青くなり、タバコに火をつけようとする人の手もやや震え、アゲートは膝を落として何かつぶやいている。

「フウ…何なんだありゃ？」

「噂以上だ…ここは活気にあるれ過ぎて何かが豪快にこぼれている」

「夢だ…あんなの夢に違いないさ…そうだ夢さ…フツフツフツフツフツフツフツ」

「気確かにもてアゲート、そして帰って来い」

何か心に深刻なダメージを負わされたアゲートは放っておき、ようやくタバコの煙を吸って頭が落ち着いてきたジンは改めて自分たちの駆け込んだ店の中を見渡した。この店も武器屋だった。ただ今まで見せられてきたような活気は無く、活気どころか今はレジに人すらいないやけに小ぢンマリとした武器屋だ。しかしここを武器屋と呼ぶには内装があまりにもファンシーに見えてならない。商品を置いているタナは普通だが、壁紙が淡い水色でコーディネートされているのが実にアンバランスだ。ジンの中の偏見なイメージでものを語るが、武器屋といえば漢の聖地で、木造やコンクリむき出しの無骨な外装をイメージしてやまない。それと比べるとこの店はまるで家の中に居るようで、さしずめこの部屋はリビングのようだ。

窓をのぞいてみると、まださっきの悪夢のおっさんたちが別のターゲットを見つけては自分の店の中に引きずり込んでいるのが見えた。哀れな連中だと心の中で合掌すると、しばらくここを出ないほうがよいと感じた。

「しかし…この店は本当に誰もいないのか？」

「オレが知るか…」

まだ気分の悪そうな人は窓際から離れると、誰もいないレジカウンターの上に座り悠々と煙を吸い込んだ。

ちょうどその直後、

「いらっしゃいませえ」

誰もいないと思われていたカウンターの向こうから、突如謎の老人が姿を現した。レジの下から首が伸びてきたかのように見えたジンは一瞬悲鳴を上げると、あまりにもダサくカウンターから転がり落ちてしまった。あんな悪夢を見せられた直後なのだ、誰だってトラウマになるに決まっている。虎眼に至っては思わず身構えて拳まで固めている始末だ。

「ああ…びっくりした」

「私も大変ビックリしました」

「ハァ…貴様がこの店の店長なのか」

「ええ、一応」

「心臓に悪い登場しないでほしいさ」

「私は心臓より最近胃を患い気味ですが」

「聞いてねえよ爺さん」

不可思議な会話を繰り返していると、レジのさらに向こうの暖簾の奥から、パタパタとスリッパを履いて歩いたような足音が聞こえてきた。足音の正体は暖簾をくぐると、三人に微笑んでくれた。

「あ、いらっしゃいませえ」

髭だらけのちょっとボケ気味なのかと疑いたくなる老人の次は若い女性だった。茶色い長い髪を一本に編み込んだ頭に糸目の笑顔、加えてお花のアップリケの付いたエプロン姿ときたもんだ。この人とこの店の内装のせいで、まるで主婦でもやっているかのような風潮を漂わせる女性だった。

「あらあら失礼、なんだか話し声が聞こえるかなあ？と思ったら、やっぱりお客さんだったんですねえ」

おまけにどうやらずいぶんとぼんやりした性格までしているらしい。彼女がそんなこ

とを呟いた途端、主人はホッホッホと笑ってしまった。

この店、大丈夫なのか？

「改めましていらっしゃい。武器屋「ヴァジュラ」へようこそ。店長のグロックです」

「娘のベレッタです。本日はお買い物ですか？それともご登録ですか？」

「登録？」

別に買い物に来たわけではないのだが、虎眼は今何気なく耳に入った登録という単語に興味を持った。

「登録とは何のことだ？」

「おや、あなた方も祭りに参加されるのではなかったのですか？」

「こちとらちょいと訳ありのワンダラーでね、この国に来たのは最近で、この街に来たのもついさっきだ」

「あらあら、それは失礼しました」

「別に頭下げる理由なんかないさ！ところでその祭りってなんなのか、オレったちに聞かせてくれさ！」

祭りというワードに心惹かれてしまったアゲートが、また首を突っ込み始めた。そうは思うも人だって祭りには興味ある、だから一緒に聞いてみることにした。

この街には二年に一度、街の名物となっている巨大な祭りが開催されているそうだ。祭りの名は「ウェポン・フェスティバル」。その名の通り、武器の祭典なのだとか。自分の実力に自信のある連中はこの時期になると一斉にこの街に集結し、各自この街の中で取り扱われている武器を使って中央エリアにあるあのスタジアムの中で一番を目指して戦うのだという。このときに使用する武器はこのグレネドの中で売っている武器を使用することが条件であり、武器を選ぶことを「登録」といい、祭りの受付時にこれを申請しないと参加資格がもらえないのが最大のルールらしい。

優勝者には賞金とその年で最強の武器使いの称号が与えられ、使用された武器を登録してもらった店は優勝者にあやかろうとして繁盛するというメリットが付録としてついてくる。つまり、最強の武器使いが選んだ店の商品はみんな最強の名に恥じない武器であるという噂が立つわけなのだ。だからここの武器屋はみんなこぞって自分の店の商品を全力でアピールして回っているというわけだ。そしてその祭りは今年も開催

され、ちょうど明日が祭りの本番なのだという

「なるほどな…だからほかの店はあんなに熱がこもっていたのか」

「はい、そういうことです」

「優勝者と提供者には名声と金…フウ、欲望だねえ」

「その欲望、素晴らしい！！とそれは置いといて、つまり爺さんたちもぜひ祭りに参加して、有名になりたいってわけさね？」

「まあ、できればという話ですが…」

「やめときな、親父」

話の流れが調子にの乗り出したころ、いきなり話の腰を折りながら誰かが現れた。暖簾をくぐって現れたのは今度は青年だった。焼けた色黒の肌、頭にはタオルを巻き首にはゴーグルをぶら下げ、タンクトップ一枚の体と片手には使い込まれた大きなハンマーが握られている。一見しただけで、鍛冶屋だとすぐにわかる風体をしていた。彼は珠のように流れ落ちる汗をぬぐうと、機嫌が悪そうな目つきでグロックを見据えた。

「武器は本来、そんな下らない見世物に使う物じゃねえんだろ？俺はそういう意味で剣を打っているつもりはない」

「わかっているよ。だがなあ・・・」

「お宅らの言うように、欲望のために利用される剣なんざ俺は打ちたくなんかねえ。あんたらもあの人殺し祭りに参加する気なんか無いならさっさと帰んな」

そう言いたいことだけ言うと、彼はまた暖簾の奥へ消えてしまった。あのハッキリとした物言いに、ジンは少しムカッ腹が立ってしまった。

「なんだアイツ？」

「すみません、わたしの兄です。失礼しましたあ」

「祭りとやらに参加する意欲は全く感じられなかったな」

「うちで商品を作っている息子のエンフィードです。重ね重ね失礼しました」

「なんだ、さっきの野郎がこの店のもの全部作ったのか？」

「半分以上はそうです。もう半分はお父さんの作品です」

どこかから仕入れているものかとタカをくくっていたが、まさかこの店の中にある全ての武器がこの一家が作ったものだったとは…煙を吐き出しながらジンは感心した。

「あんな態度をしているが、武器職人としての実力はどうなんだ？」

「私が仕込んだ息子ですからね、売り物にしても恥ずかしくないものを作ってくれます」

爺さんはニッコリとほほ笑みながら、息子の実力をたたえた。

そこまで言われるとジンも少し興味を持ってくる。すぐそばにあった刀剣を数本差しこんだ樽の中から一本を適当に選び、鞘から抜いた。するとどうだろうか、鞘から出てきたのは、剣と呼ぶにはあまりにも美しい姿をした刃だった。刀身は綺麗に磨き抜かれ、鏡のように光を反射させている。さらにそれだけではなく、表面には植物の蔓を連想させるような細やかな装飾もなされている。

鞘から抜き取り振ってみると、これまた軽く振り回すことができた。一目ただけで、この剣は良い品物だと素人のジンでも理解できるような一品だった。

「ほう…随分いい代物じゃねえか」

「息子の作品です。ちなみに私がその表面の装飾を手がけました」

「表面はわたしが一生懸命磨きましたあ」

そう言うとベレッタは細い目をより細くさせてほほ笑んだ。虎眼がよく彼女の手を観察してみると、彼女の指は年頃の女性としては悲しいほどに荒れていた。この件一本の表面をこれほどまで見事に磨き上げるには相当化労力が必要となるのは予想がつく。それはただ「一生懸命」で片づけられるようなレベルの話ではない。この店の武器すべての輝きが、彼女の苦勞によって生まれた輝きなのだ。

「妙な話だな。これだけの腕を持ち合わせておきながら、なぜ売り上げが悪いのだ？」

「そう言えばそうさね、こんだけの物だったらもっと店を大きくしても売れるとオレっちも思うけどさ？」

ジンと同様、壁に飾られていた大きなバトルアックスに目が奪われていたアゲートが我に返り、店主に問いかけた。

素人目から見てもこの店の商品はさっきまで見てきた武器屋と比べてレベルが違いすぎる。なのにこんな小さい店で細々と商いをしているのはあまりにもバランスが悪い。

「それが…最近できた大手の武器屋に、お客さんをみんな持ってかれたんです」

「大手？どこの店だ」

「「グングニエル」という新設の武器ブランドメーカーです。ご存じありませんか？」

「あいにくオレ達やそういうことには無頓着なのだ…」

感覚を確かめているのか、はたまた遊んでいるだけだったのか知らないが、ようやくジンが剣を鞘に戻し話の中に入ってきた。

ここから先は解説式で説明していこうと思う。

武器メーカー「グングニエル」、8年前に設立されたばかりの職人連中に言わせればまだまだケツの青いブランド社。当時開催されたウェポン・フェスティバルの優勝者がこの店の商品を利用したことが事の始まりだった。

噂が噂を招き、店の商品は飛ぶように売れて巨万の財を成し遂げたのだ。欲の深い社長はこれに乗じて店舗経営を一気に拡大、ついには他の武器屋の土地を買い占めて自分の店を大きくすると同時に、腕に自信のある武器職人を金で雇い新たな武器の製造へ熱を入れるのだった。

それから次の年のウェポン・フェスティバルでも優勝者を導くと、今度は大陸のあちこちに店を構えるようになった。

この話の中で、この店はグングニエルに店を買収される側になっていた。元々この店「ヴァジュラ」もキチンとした店を構え、使用より魅せるための武器を製造してそこそこ儲けていたのだが、数年前に土地と職人の買収騒ぎが持ち込まれたのだ。当時まだ武器を作っていた主人はこの話を断固拒否。しかしその数日後、連中はあろうことか暴力団及び、金で雇われた法の番人を連れてくると不当な契約を強制的に結ばされ、店からまるでネズミのように追い出されてしまったのだった。

取り残された主人と家族はいったん店終いを考えたが、エンフィードの強い要望から店を再建させることとなった。この東エリアの中でこの小さな土地を買い、家を建て、一回を販売と製造のための店に作り替え、ここで新たに暮らすようになったのだ。この頃に主人は武器職人を引退し、自分の持っているすべての技術をエンフィードに叩き込んだのだった。

しかしいざ店を開けると、客足はカラっきしだった。

風の噂ではあのグングニエルが町中に根を張り、もしも買収した店がもう一度店を開業させたら繁盛できなくなるように無いことばかりを噂に流して、客を盗んでいるの

だとか。

同じ境遇を味わっていた同業者が直接グングニエルへ赴き直訴を申し込んだら…数日後そいつは自分の店に指だけになって帰ってきたらしい。

以後、グングニエルに逆らおうとする店はかなり少なくなったという。

「…気に食わない話だな。そこまでわかっているなら、なぜ軍隊へ届け出ない？」

「無駄だったんです。あの店が原因でうちが儲からなくなったのにも、その人が殺されたのにも、証拠が全く無いんです」

「ヒッデー話さね…あ、だからさっきの息子さんの機嫌悪かったのさ？祭りの話を聞いたから」

「そんなところですよ」

珍しく自分の勤が冴えたことを喜び、アゲートは小さくガッツポーズをした。なるほど、アイツは祭りの時期になるとそのグングニエルのことを思い出してあんなに不愛想になるのか。

「でも、正直なところ売り上げが落ち込んでるのも事実ですよ」

「あんなことを言っていますが、もしもよろしければ祭りに参加して、うちで登録してみる気などないでしょうか？」

商売人として、心からの願いに二人は潔く頭を下げた。そのグングニエルの連中を動かしてやりたいという気持ちは決してわからないでもない。

ただし・・・

「…断る」

「だな」

あろうことか虎眼とジンがその願いと頭から断ってしまったのだ。アゲートは二人へ食い下がろうとしたが、今回この街へ寄ったのは車の燃料と食料、水の確保とボロボロになった武器の鍛え直し。この街でこんな祭りが開催されるなんてついさっきまで知らなかったのも事実だし、個人的に夜会ごとに巻き込まれるのはもう御免だと話した。

そんなことを否定しきれなかったアゲートも、やむなく祭りへの参加は辞退する形となってしまった。しかし二人とも完全な鬼というわけではない。気持ちだけでも売り上げに貢献させるために、せめてこの店で自分たちの武器を鍛えてもらうこととした。それが3人にできる精一杯の善意だった。

2人は嫌な顔一つせず、3人の武器を快く預かってくれた。仕方がないのだと割り切ってもらって他、今ジンたちにできることは一切何もない。この店にはなに一つの愛着も一欠片の借りもないんだ。

店を後にすると、またあの悪夢の時間がやってくるのかと思い3人は身構えたが、ラッキーなことにあの時ほど人の出歩きは少なく、おまけにあの悪夢たちはすでに捕まえた客への接客でこちらへ注意が注がれていなかった。不幸中の幸いというのか、3人はスイスイとこのウェポンストリートの外へ歩いてくことができたのだった。

「ンン…なあジン？」

「ダメだぞ」

「なんも言ってねえさあ！」

「どうせ今からでもあの店に戻って祭りに参加しようなんて言いてえんだろ？却下だ」

「なんでそんな頭ごなしに否定するのさあ？オレっちたちならきっと優勝だって狙えるさ」

「学習しろアゲート。貴様今まで何回他人の身の上話を聞かされ、その度に厄介ごとに巻き込まれてきたと思っている？」

「オレ達の目的はその祭りで優勝することじゃねえ。本来の目的を見失ってるなら、お前はもうここで仕事降りろ」

2人にここまで言われてしまっちは、さすがのアゲートもグウの音も出なくなった。ようやく諦めがついたのか、それから先はずっとうなだれたまま二人の後をついて歩いた。

だっつうのに…ウェポンストリートの出口までようやく来たところで、事件は起きてしまった。

「いらっしゃいませ～！そこの3人型、新しく武器を購入してみたいはいかがでしょうか～？」

また着やがった、買い物の勧誘。しかも今度は茶髪のチャラチャラした野郎じゃないか。この手のタイプの野郎は見るだけでイライラしてくるのに、声なんかかけんじゃねえよ。

「結構だ。こっちとら愛用のエモノを直してもらってる最中だ」

「そんなこと言わないで、どこで買ったナマクラ武器かは知りませんがうちの品なら高品質、低価格、一年間の無料保証までつけてますよ～？今日をきっかけに買い替えてみませんか？」

ガツンッ！！

強引な勧誘に真っ先に腹を立てた虎眼が、漢の顔面へ裏軒をお見舞いしてやった。男は鼻血を吹き出しながら仰向けに倒れてしまった。

「ったく…ウゼエ」

「痛ッ…痛いじゃないかい、いきなり何をするんだ！？僕が一体誰だか分かっているのか？武器ブランドメーカー「グングニエル」の店長、スチェックンだぞ！」

地面の転がりながら何か泣きわめいていると、その口から例のグングニエルの名前が飛び出して、3人は足を止めて振り返った。このしりもちをついて泣き目になっているこの男が、まさかあのグングニエルの関係者…それどころかまさかこんな若さで社

長だなんて。

ってことはこいつがあの家族の店を奪い、店舗拡大のために人の命まで奪う連中の親玉ってことか。3人は一瞬表情が固まり、睨むようにこいつを見下ろした。

「痛いじゃないか、治療費請求するぞこの野郎！」

「んなことはどうでもいい…テメー今さっき、どこの店の社長だって言った？」

「ほほう、ようやく気が付いたかい？僕の存在に」

「さっさと答えろ…今度は踏むぞ」

「ひい…グングニエル、僕はこの街で最も大きな武器屋、グングニエルの社長だ！！」

男はすっと立ち上がると、胸を張ってそう答えた。ジンはちらりと周囲を見渡すとそれはすぐに見つかった。

ジンの目の前には特に大きな武器屋が馬鹿デカイ看板をおっ立てていた。一見しただけではまるでスーパーのような広い敷地をしているが、看板には間違いなく「グングニエル」と掲げられていた。

自分から街一番と呼ぶのは伊達ではなかった、確かに周りの店と比べると店の大きさも品揃えも比べ物にならなかった。ここまで大きくするために、一体何人の血と財産と涙を奪い去ったのか想像すると、虎眼は虫唾が走った。

「というわけで、この街で武器を買い揃えるならうちの店だけで十分。他の店の売り物なんてまさに鉄クズ同然！」

自信満々にそう語るが、ジンがここに並んでいる刀剣を見る限り、この程度ならあのヴァジュラの剣の方がよっぽど上等だ。輝きは鈍い、振れば重い、そしてやたらと売値が高い…武器の百貨店でも気取っているのか知らないが、損だったらこんな店ではまず買わない。

それだというのに自分の自惚れに溺れ、真の職人の技術をクズ呼ばわりするこの男に、ジンは急にムカッ腹が立ち始めた。

「…おい、まさかこの店から例の祭りの参加登録は出てるのか？」

「もちろん！それどころかウェポン・フェスティバルに参加する選手の半数以上が、我がグングニエルの商品で登録してくださっている！！このままだと、祭りが終わった頃にはまた売り上げが伸びてしまいそうで困ってしまうよ、あははははは！！」

メキャツ！

今度はバカみたいに店を自慢し高笑いを決め込むこの男に、ジンが顔面へ足の裏をお見舞いしてやった。スチエッキンは顔面を土まみれの血まみれになると、ゴロゴロと転がって気絶してしまった。

「あ～あ・・・やっちったさ～」

「…もうなんとなくわかる気がするが、これからどうするつもりだ？」

「…戻るぞ」

ジンは踵を返すと、足早になってヴァジュラへ戻った。賞金にも名声にも今は全く興味なんかないが、別の用事が出来てしまった。

あの店を見つけて扉を開くと、店内では店主とベレッタが悠長にお茶を楽しんでいる最中だった。3人は何も言わずに店内を物色し始めると、それぞれが見つけたものをカウンターの上へたたきつけた。ジンは最初に見つけたあの剣を二本、アゲートは肩に担げそうな位に大きなバトルアックス、虎眼はガントレットを選択した。

「コイツで祭りの登録を頼む」

「え・・・え？」

「いったいどういう風の吹き回しですか？」

「なんでもないさ・・・オレっちたちどうも余計なことに首突っ込むのが趣味みたいなさ」

「優勝することに興味はない…だが」

「爺さん、安心しときな。グングニエルはオレ達で店終いさせてみせるからよう」

ジンたちがウェポン・フェスティバルに参加する理由、それはあの金の力で天狗になっているグングニエルの出鼻を根元からへし折り、泣きっ面拜んで笑い飛ばしてやるためだ。そのためにならわざわざ優勝を狙ったってかまわなかった。そんなことには一切気が付いていない2人は泣きながらジンたちへ頭を下げてくれた。しかしこの時はあのいけ好かない跡取りの姿は見えなかった。

ウェポン・フェスティバル参加の手続きは、中央スタジアムの正門入口にある総合受付所で行われている。本番前日だというのに、ジンたちが受け付けに来たときにはまだ大勢の参加者が登録の順番を待っていた。みな一様に自分専用の武器をぶら下げている。

「オーオー盛り上がってるねえ？」

「人がごった返して暑いさ、おまけに臭いさ！」

「しかし、大したことは無さそうだな」

戦闘のプロ中のプロ、虎眼の鑑定眼によればここにいる連中は言わせてしまえば皆2流から3流といった自信過剰の腕前しかないと見た。武器の性能にのみ頼りきり、武器を操る自分を鍛えることを忘れてしていると呟きだしている。

そしてもう一つ、面白いことにも気が付いた。たとえば今虎眼たちの前に並んでいる男、こいつの持っている武器は大型のグレートソードなのだが、刀身には大きくアルファベットのGを模した焼印が押し付けられている。この男に限った話ではない、周囲の武器をよく観察してみると、ここに並んでいるほとんどの連中の武器に同じような焼印がある。情報から整理すると、この紋章はグングニエル印の武器と見た。祭り参加者の半数以上がグングニエルの武器を使っていると確かあの野郎が言っていたが、どうやらその話は嘘で話さそうだ。狩りに虎眼も認めるような実力者がグングニエルの武器を使用したとなったら、ただでさえ倍率の低い他の店舗の武器に勝ち目はぐっとなくなってしまう可能性がある。何としてでも勝ちたいという気持ちが沸々と湧き上がってきた。

「次の方どうぞ」

前に並んでいた連中の登録が終わり、ようやくジンたちの番が回ってきた。ここでジンたちは差し出された祭り参加者用紙に参加するメンバーの名前と、登録した武器と店舗名と記入した。

用紙には都合よくこの祭りの参加規程のほかに、ルールも記されていた。この祭りに参加することができるのは、最低二人以上チームを組んだものしか参加することができず、個人での参加とグレネドで扱われている武器以外の使用が固く禁じられていると書いてあった。ちょうど三人で登録するんでここまでは問題なかったが、この次にどうでもいいくらい厄介な問題にぶつかってしまった。

「それでは最後に、こちらの欄に参加チーム名を記入してください」

「・・・え？」

記入用紙の一番下を指さされると、そこには参加するためのメンバーで行使されたチーム名を書く欄が設けられていた。

代表で用紙を書き続けていたジンの手が止まり、助け船を求めて後ろで待機していた二人を呼んだ。

「こういう名前を決めるのは苦手だ、何か意見くれ」

「フム…意外なところで溝に落ちてしまったな」

「オレっちそういうの得意さ！え〜っと・・・ゆかいな仲間たち！」

…アゲートの第一の意見は速攻で却下された。

第2：ラブチナ王国公認冒険隊 却下

第3：チームAHJ（アゲート、虎眼、ジン） 却下

第4：トライアングル3 却下

第5：斧とメガネと格闘家 却下

etc.etc.・・・

結局制限時間以内に答えを導き出すことはかなわず、最終的に3人のチーム名はAA
AA（名無し）に決まってしまった。

翌日の朝、祭りの参加者は自分の武器を受け取るために昨日と同じ総合受付所へ集結していた。今日はここで参加登録者の確認と登録した武器屋の武器を受け取ることになっている。（ちなみに虎眼は前日のうちに一度昼寝をし、再び夜に睡眠をとったので一周して虎眼に戻っている。）参加登録祖した時、参加したものは誰も武器を持ってきていない。登録をもらった店側が参加者の武器をこの受付まで持ってくるシステムになっているそうなのだ。それが武器屋としての誇りであり武器を提供する側としての義務だと誰かが語っていた。

昨日の夕方、登録を終えて時間を持て余していたジンが街の中を一人で散歩していたところこの受付所の前に大きな荷台を担いだトラックを見つけたのを覚えている。きっとあれがその参加者の武器を乗せたトラックだったのだろう。

3人もさっそく武器を受け取るつもりで並んでいたが、ここまで来て一番の問題が突然発生してしまった。

「俺達の武器がまだ届いていないだと!？」

「はい、登録をいただきましたヴァジュラの店からまだ登録武器の配達は届いておりません」

受付嬢は手元にある機械をいじりながら懸命に検索をするが、大会側にはまだ武器は届いていないと表記されている。時刻は9時、祭りのオープニングまであと1時間しかない。

「どういうことさ!？なんでオレっちたちの武器がねえのさ？」

「そちらに関しましてはこちらではわかりかねます」

「チィ…こんなところでアクシデントかよ！」

ジンは吐き出した吸殻を踏みつぶすと、苦虫を噛み潰したような渋い顔になった。あの爺さんが武器の配達を忘れるとは思えないが、まさかあのぼんやりした娘さんが持ってくるのを担当して忘れたのか？それとももしかしてあの祭り参加に渋っていたあの野郎か？参加したくねえから武器を自分が取り上げたり、あるいは今もなお口論しているとか。

とにかくこんなところで考えててもラチが開かない、アゲートをここに残し虎眼とジンの2人が急いでウェポンストリートへ走った。こうなったら自分たちで持ってくる他ないと見たのだ。

「ったく、面倒くせえなあ」

「ゴチャゴチャ言っても始まらない、今は急ぐぞ」

今朝の東エリアは、昨日と比べるとまるで別のエリアに来たかと思うくらい静かだった。店はほとんど閉められ、人の歩く姿も見えない。きっと全員あの祭りを観に行ったに違いない。人混みがないのなら思いっきり走ることができるので2人はあっという間にヴァジュラの前へ来ることができた。扉には「クローズ（閉店）」の立札がブラ下がっている。窓にはカーテンがかかったままで中を覗くこともできない。おまけに扉に手をかけてみると鍵までかかって店に入ることもできないときたもんだ。ここまで来ると、虎眼は何か妙なものを感じ始めた。具体的にいうことはできないが、何かが不自然なのだという。

やむなく虎眼は強硬策として、鍵のかかったままのドアノブを破壊し、無理やり店の中へ入ることとした。

店の中は、昨日見たときと何も変わっていなかった。強いて違うのは商品を並べた棚の上に埃除けの布が被せてあるだけだ。外見だけは何の違和感もない、だからジンと虎眼は何も変わっていないからこそ何か違う違和感を覚えている。

「…虎眼、オレの勘なんだが、何か厄介ごとの匂いがする」

「偶然だな…俺もそんな気がする」

もしも店の中に何も無いとしたら、あとはあのカウンターの向こうにある暖簾の奥だ。

虎眼が先にカウンターを乗り越え、静かに暖簾を持ち上げて奥を確認した。正面には竈が見える、あれが鉄を溶かすための窯だとしたらこの先が鍛冶工場なのだろう。

明かりが点いていないせいで少し薄暗いが、虎眼の目が工場の隅に転がっているものを見つけた。あれは人の足のようにも見える、そう思って一步暖簾の奥に足を入れた。

。

その時！

ガキーン！！

間一髪、虎眼はとっさに身をねじってこれをかわし、それは堅い石造りの廊下へたたきつけられ耳障りな金属音を響かせた。一瞬前まで虎眼の頭があった場所へ落ちてきたのは、鉄製のメイスだった。これは何らかの事故でも防犯対策に設置したトラップでもなんでもない。メイスを握り、こちらを睨んでいる男がいた。エンフィールドではない、全く知らない厳つい顔をした男だ。男は気合を入れてメイスを持ち上げると今度は横一線に振り払ったが、それを虎眼は素手で受け止めてしまった。

その次の瞬間、虎眼は漢のみぞおちへ拳を叩き込むと、一瞬呼吸が止まりながら男はあっさりノックダウンさせられてしまった。相手が悪かったとだけ言っておこう。

「大丈夫なのか？」

「俺はな…コイツなら当分目は覚まさないだろう」

「しかし誰だこいつ？」

「…ジン、こんなところにご丁寧な身分証があるぞ」

虎眼がジンへ見せたのは、この男が使っていたメイスだった。それを受け取り、握り手の底を覗くとそこにはあの忌々しいGの焼印が押されている。この男はグングニエルの人間だった。

「どういうことだ？」

「大方予想はつくだろ…それよりジン、あれを」

顎で示された先にある例の人の足、男を踏み越えて急いで中へ駆けつけると、足の持

ち主はエンフィールドだった。しかし健康状態は非常に悪く、顔や体中あちこちに大きな痣ができていたり、血も流れている。ついでにそのさらに奥には主人もケガをした状態で倒れていた。

もはやただ事で済むような話では無くなっていた。幸いなことに二人ともまだ生きていたようだが、急いで手近にあるもので応急処置を施すと、エンフィールドがゆっくりと目を覚ましてくれた。

「うう…あんたらは」

「安心しろとは言い切れねえが心配すんな。つうか、何があったんだ？」

「グ…グングニエルの、連中が…武器を、あんたらの」

「…持って行ったというわけか」

虎眼の問いかけに、エンフィールドは頷いた。

ようやく見えてきた。グングニエルの連中は、何らかの腹いせにオレ達を祭に参加させないよう登録した武器を盗みやがったんだ。この様子から考えて、二人も必死に抵抗したのだろうがボロボロの返り討ちにされ、さっきの男はジン達がここに来ることを見越して待ち伏せていたのか。

考えるに、こんな下らねえ腹いせを考えるのはあの昨日ボコボコニされて泣き喚いたグングニエルのクソバカ野郎だろう。昨日見つけたトラックの中にアイツが乗ってたとして、もし祭り参加者名簿も見ることのできる権限があってジン達の名前を見つけ、この店のことを知ったとなったら、あとは簡単だ。

「あの野郎…病院から出てこれねえくらいにしておくべきだったか」

「やるしかないな…連中の隠れてそうな場所はわかるか？」

「多分、倉庫…北にあるグングニエル専用の武器倉庫」

ここに来る途中、グングニエルの店にもシャッターは閉まっていたのは知っている。自分の店に隠れるなんてわかりやすいことをしないくらいの頭を持ってるとしたら、次に出てくるのが倉庫って訳か。二人のハラワタはすでにマグマのように煮えくり返ってしまった。ジンと虎眼は人殺しのような目になると、二人を安静にさせると商品の剣を適当に二本拝借して店を飛び出した。

北エリア、武器倉庫街。ここにはこの街の武器屋でも特に大きい店が所有する武器の在庫を保管するための倉庫しか建っていない。家一軒分よりの大きい倉庫の扉には、各店舗が間違えないようにその店のエンブレムが刻まれている。だからジン達はこの迷路のような倉庫街の中からグングニエルの専用時倉庫を見つけることは容易かった。

それを見つけるや否や、虎眼は何のお構いもなしに扉を一撃で蹴り壊し倉庫の中へ侵入した。

ビンゴ。家が軽く6件分は入りそうな位だっ広い倉庫のちょうど真ん中あたりにそれっぽい連中が待ち受けていたかのようにたむろっていた。皆一様に店の商品である武器を手に持ち、明らかに自分たちの方が優勢であるかのような余裕の笑みを浮かべニヤニヤしながら二人を眺めている。そしてそのちょうど真ん中に、木箱の上に腰かけていたのがあのクソ野郎だ。

「いらっしゃませお客様…武器屋グングニエルへようこそ」

スチェッキンはこの中に居る屈強な男どもの中で特に気色の悪い笑みを浮かべながら、二人を出迎えてくれた。こうなることも考えて軽く20人も保険をかけておくとは用意周到な奴だとほんの少しだけ関心してやった。

「せっかくだから買い物でもしてやるよ…ヴァジュラで登録したオレ達の獲物、どこにある？」

「んん〜…さあ？」

「あくまでも知らばっくれるのなら強行策も考えるが、どうする？」

虎眼はいつぞや見せたあのドラゴンへの威嚇にも似た激しいオーラを漲らせながら拳の骨を鳴らした。ジンもすでに剣を一本鞘から抜いて戦闘態勢に入っている。

「はいスト〜ッピ…これなんだか分かるう？」

虎眼の威嚇にも屈しないスチェッキンが指をパチンと鳴らすと、後ろから何かを担いできた男が現れた。肩に担がれているのは、あの時店に姿のなかったベレッタだった。ベレッタは猿轡を噛まされ、縄で簀巻きにされている。まさか人質までとってこんなくだらないことを計画していたとは、余程のアホだと感じてしまった。

「この娘殺されたくなかったら、おとなしく僕たちにボコボコニされな。僕はお前たちが目の前で泣いてわめく姿を拝むことができればいい。ああ、ついでに昨日のことも土下座して謝ってもらおうじゃないか。まだ大分痛んで結構苦しいんだよ」

やっぱりこの計画はジン達への仕返しで間違いなさそうだ。そのために二人はあんな連中にフクロにされた拳句土下座して謝り、おまけに祭の出場も事態となったらそうはいかない。

ジンの堪忍袋はすでに限界を軽く超えていた。ギリッと歯を食いしばると、鬼の形相で走りだした。

しかしそれはすぐに制止させられる。ジンが足を動かした直後、ベレッタを担いでいた男が持っているナイフを彼女の首へあてがったのだ。ベレッタは声に出せない悲鳴を上げ涙を流すと、ジンも急ブレーキをかけて足を止まってしまった。

「フッフ…それ以上近づいても殺すよ？」

「・・・チィ！」

あの人質を何とかしなくてはやってられないようだ。目標までの見積もりは大体15m、ジンの剣も虎眼の拳も全く届かない距離だった。だが、ここでジンはひとつ面白いことを思い付いた。

「オイ、ここから先は近づいちゃならないんだな？」

「ああそうだと、そこから一步でもごいたら殺す。この距離からだったらそのナマクラ振り回したってかまわないぞ？当たればの話だけどな、ハハハハハハハハ！！」

完全に余裕をかましているスチェッキンと一同はゲラゲラと笑い転げてしまった。その瞬間、ジンもわずかに口元に極悪な笑みを浮かべる。虎眼もこの表情から何かを読み、少しだけ期待を寄せた。

「…言ったな？」

ジンはその場から一步だけ引くと、さっき抜いた剣を鞘へ戻し腰を低く構えた。しばらく前、ピースメーカーに乗ってこの国に来る前、船内で読んだ本に書いてあった剣術、「居合」の構えを見様見真似でとっている。呼吸を整え、気持ちをゆっくりと静めながら、剣の留金を外す。

気力が頂点へ達した瞬間、ジンは全力で剣を引き抜いた。体がねじれ、バランスを崩しそうになるまで振り抜かれた剣は空気を切り裂き、涼しい音を倉庫全体に響かせた。

その時だ。剣は間違いなく空気を切り裂いた。正確には、衝撃で空気が圧縮され真空の刃となってまっすぐに飛び出したのだ。ひそかに練習と工夫を凝らしているうちに完成したジンの技、「交響曲（シンフォニー）」である。

見えない刃に注意を向けなかった男の腕は、その直後スッパリと切り落とされてしまった。ベレッタを担いでいた腕が切断されると、ベレッタは腕と一緒に肩から落ちて尻餅をついてしまった。もっと悲惨なのは漢の方だろう、突然腕が痛み出したと思ったら次の瞬間手首がなくなって血が噴き出していたのだから。おこころしくない悲しい悲鳴を上げて喚きだすと、周囲の空気がガラリと変わってしまった。ジンはスチエッキンに言われたとおり、その場より先へ一步も動かずに攻撃を仕掛けたのだった。

「・・・！？殺してしまえ！！！」

周囲がうろたえ繊維が喪失してしまう前に、スチエッキンの一声で目が覚めた連中が一斉に雄叫びをあげながら迫ってきた。

派手な喧嘩の雰囲気になってしまえばあそこちのものだった。

まず正面から襲ってきたのは8人、これをもらったのは虎眼だ。正面へ躍り出た瞬間、拳を振り抜いた。ただ振り抜いただけではない、高速で襲い掛かる拳は素人の視力で見ればまるで分裂したかのような錯覚を覚え、一つの拳が8つへ分身した。多人数を一撃で片づける虎眼の高速拳、「大蛇舞踊撃」だった。攻撃を食らった連中は地面へ転がり、あっという間にノビてしまった。

ジンに至っては少し危険な状態だ。このところ剣で切り付ける相手は食料を目的としたドラゴンばかりだったから、自然と喉笛を狙って切ってしまう癖がついてきていつ。さすがに殺しまで灰が乗らないので慎重に意識しながら武器やら腕やら足やら、今後の生活に支障をきたす程度の大けがを負わせるようにブツタ斬りまくった。

所要時間わずか5分足らず、あれだけ痛屈強な護衛は皆体の一部を失ったか、臓器や顔の一部を変形させて床の上に倒れてしまった。

残されたのは立った二人、目を点にさせて素直にビックリしているベレッタと恐怖に心を支配され青ざめるスチェッキン。ユラリと二つの影が悠々と腰かけている首謀者の方を向くと、両の瞳をキラキラと光らせて迫ってきた。

「あとは一人…どう料理してやろうか？」

「細切れにしてミンチ、切り裂いて刺身、すり潰してツミレ、叩いて捏ねてハンバーグ、どれが好みだ？」

「ヒヒイイイ！！！！ま、待ってくれ、悪かった！全て僕が悪かった！全部謝る！謝っただけでダメなら金も出す！いくら欲しい、100万Lか？200万Lか？金だけならいくらでもあるぞ？そうだ、いっそのことうちで働いてみる気はないか？給料は手取りで月50万L、特別待遇もおまけに付けて決して苦のない生活を保障しようじゃないか！！」

・・・・・・・・・・。

呆れかえってもものが言えなくなった。頭を下げる相手が違う上に謝罪の方法が金、金、金・・・・こんな金の亡者、まともに生かしておいていいのだろうか？

二人の心に届いた返事はひとつ…

NO

徐々にプツンキレたジンは、二本の剣を同時に振り抜くと「序曲」による小型の竜巻を発生させ、スチェッキンを飲み込んだ。悲鳴を上げて倉庫の中を飛んでしまったスチェッキンへ、虎眼が追撃を迫る。野生のヤギやシカのように壁と鉄骨の柱を交互に蹴り、空中を漂うスチェッキンの背中へ、虎眼は「青龍脚」を勢いよくぶつけた。足の裏全体で背骨の砕ける音と筋肉や内臓の引き裂かれる感覚を感じると、そのままスチェッキンは倉庫の天井を突き破りどこかへ見えなくなるまで飛んで行ってしまった。

やること全てを片づけた二人は満足そうに、実に清々しい表情へ変わっていた。猿轡を外し、体を締め付けていた縄も切り落とすと、ようやくベレッタは解放されて体を伸ばし悠長にストレッチを始めた。

「フウ、おかげさまで助かりましたあ」

「構いはしない…俺達は貴様を助けるためではなく別の目的できたんだ」

「あったぞ虎眼！！」

あちこちに並んでいる大量の木箱の中を無作為に開き続けていたジンは、ようやく自分たちの武器を見つけることができた。このために壊された納品用の木箱はすべてボロボロになってしまったが、今はそんなことなど関係ない。時間を確認すると、あと15分で祭りが開催されてしまう状況下に置かれていることが分かった。

虎眼は3人分の武器を担いで一足先に倉庫を後にし、ジンはベレッタを背中に担いで一度ヴァジュラへ戻った。ケガひとつ追っていないベレッタを無事送り届けるとジンもスタジアムへ急いで走った。この時間でもう間に合うかどうか少し怪しいが、きっと何とかなるだろうと短絡的に考えマイペースな急ぎ足で走った。

続く